人の生と死

メチニコフの人性論

Etudes sur la Nature Humaine

イリヤ・イリッチ・メチニコフ 著
八杉龍一 訳

本社

メチニコフの人性論

人の生と死

江苏工业学院图书馆
藏书章

イリヤ・イリッチ・メチニコフ著
八杉龍一訳

新水社

〔著者紹介〕

イリヤ・イリッチ・メチニコフ

1845年生まれのロシアの動物学者，医学者。比較発生学を進化の観念にもとづいて無脊椎動物の範囲まで広めた。生物進化論も研究し，ダーウィニズムの普及に力があった。1888年よりパスツール研究所員となる。長寿と乳酸菌の因果関係を明らかにした。

〔訳者紹介〕

八杉龍一（やすぎ・りゅういち）

1911年　東京青山に生まれる。

東京大学理学部動物学科卒業。生物学とくに進化学，科学史，人間論の研究および著作に従事。東京工業大学教授，早稲田大学教授を歴任。

《主な著書》『一生物学者の思索と遍歴』『生命論と進化思想』『ダーウィンを読む』（以上，岩波書店），『近代進化思想史』（中央公論社），『生物学的人間像』（青土社），『ロシアの科学者』（弘文堂）

《主な訳書》ダーウィン『種の起源』（岩波書店）

人の生と死——メチニコフの人性論

1991年3月30日　第1刷発行

著者　**イリヤ・イリッチ・メチニコフ**

訳者　**八杉龍一**©

発行者　**村上克江**

発行所　**新水社**

〒102　東京都千代田区飯田橋1-6-8　三友ビル 302

電話　03-3261-8794　　FAX　03-3261-8903

印刷所　壮光舎印刷

ISBN　4-915165-35-3　C1045

乱丁，落丁本はお取り替えいたします。

本書の無断転載・転用・複写は禁じます。

人の生と死◉目次

目次

初版の序文 7

第一部 人間の本性における調和と不調和 13

第一章 人間の本性についての概観 14

第二章 下等生物の調和と不調和 30

第三章 人間がサルから生じたという仮説 33

第四章 人間の消化器官の構造の不調和 57

第五章 生殖器官の構造と機能の不調和、家族本能および社会本能の不調和 78

第六章 自己保存の本能の不調和 86

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二部 人間の本性の不調和から生じる不幸を減少させる試み（宗教と哲学体系） 91
第七章 人間の本性の不調和とたたかうための宗教の試み 92
第八章 人間の本性の不調和とたたかう哲学体系の試み 114
第九章 科学は病気とのたたかいで何をなしとげられるか 135
第一〇章 老化の科学的研究への序論 156
第一一章 死の科学的研究への序論 163
第一二章 概観と結論 193
解説 217
あとがき 265
人名リスト 273

人の生と死

初版の序文

私は人間の存在について、いくらかでも全般的かつ完全な見解をつくりあげたいと思って、この著作を書いたのである。この問題についての観念が発達してきた歴史に関して、若干述べておくことは、むだではないと思う。

私の属する世代は容易に、かつ急速に、主として物理的諸力の統一性と種の可変性についての研究を中心に発展してきた実証的世界観の基礎を、わがものとするようになった。この世界観の自然史的な面は思想のあらゆる要請にこたえてきたのであるが、しかし同時に、人間の生活に関係するその応用的な部分は、十分に意義があり根拠づけられた生活をしたいという欲求を満足させることが、ますますできにくくなってきているように思われる。このような状態のもとでは、人間のなかで自然がそのぎりぎりの限界まできてしまっているという見かたに傾きやすい。ながい、複雑な、そしてしばしば紛糾した発達過程の結果として、高度の意識を付与された存在が地上にあらわれた。その意識がこの存在に、いくところはどこにもなく将来になんの目的もないのだということを、暗示してしまった。

そのような見解はながく、ぼんやりした「世界苦」としていいあらわされてきたが、知識の発展にともない、もっと明確な形をとるようになった。一九世紀の厭世論的哲学体系は、科学思想のなかにも共感を呼んだ。じっさい、意識によって理解される生命とは、指導原理をもたない、何かある動物的遺伝の基礎の上にひろがった無意味なものであるようにみえた。科学は、ただ、すくなくとも事物のそのような悲観的状態の起源と発達を明らかにするために、この混乱をくわしく研究するだけのものとなった。

私は三五年前に、人生が不合理であることの原因をとらえることができたように思った。子イヌが母親の監督をうけながらする行動を観察して、私は、イヌという動物では教育がいかに容易になされるかに驚かされた。子イヌは母親のすることをすべてまねして、しだいに、おとなのイヌに必要なあらゆることを習得する。子イヌの発育の短い期間とながくつづく人間の教育年齢の期間との間には、なんという大きな差異のあることか。また子イヌとおとなのイヌの間のとるにたらぬ差異とくらべて、人間の子どもとおとなの間の差異は、なんと巨大なものであることか。このような状況のもとでは、子どもたちが両親の行為をまねするということは、よいどころではなく、もっとも悲しむべき結果に導く可能性がある、ということは疑いない。それゆえ、人間の教育期間のうちにこれほど頻繁に生じるいろいろの災厄が純粋に生物学的事実、すなわち幼年期のながい継続期間と子どもに特

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

有の行為の間の不一致に依存する、ということは、明らかである。私はこの考えを、一八七一年の「ヨーロッパ通報」に掲載された論文で展開した。人間の本性の不調和が大きな不幸の源泉であるということについての考察は、その論文ではじめて述べられた。私には、人間の本性の基本的欠陥が必然的に生存の拒否へと導くにちがいないと思われた。そうしてまもなく私は、私の観点を証明するような十分な事実的資料を発見できることを期待して、自殺の問題の研究にとりかかった。文明の進歩に並行して自殺件数が漸次増加していることが、私をこの仕事にむかわせたのであり、私はこの題目について論評を書きはじめた。しかしまもなく、この問題は総じてきわめて混乱した複雑なものであることを知り、私は自殺についての論文は未完結のままにしておいて、他の論文「結婚年齢について」を書いた。この論文での主要な思想は、結婚と性的成熟との不一致、すなわち生物学的不調和であり、それは文化の完成とともにしだいに痛感されてきたものである。

このように、私には、実証的な知識が厭世論的世界観の基礎をつくってしまうように思われ、私はそれをますます確信せざるをえなかった。青年の感じやすさが、また一方、その厭世論的世界観をいちじるしく育てあげてしまった。私は一種の批判的な人間解剖学を思いつき、それによって人間の本性の実際にあるすがたとわれわれがその本性に対して要求するものとを比較してみようと考えた。

しかし私の一生はおのずから経過し、青年の感受性と人生へのその貪欲さとは、しだいに、成年そして老年のおだやかな感情に変わった。老年の不調和は、人間的不幸の本質がまさに人間の本性のうちにあるということはつねに明らかであるとしても、またちがったふうに考えられるようになった。

前世紀の後半における医学のめざましい進歩は、よりよい未来への期待を与えた。人間という存在は、その人間がいま現実に示している性質にもとづいてみられることがどうあろうと、もしもその性質を変えることができさえすれば、根本的に変わりうるのである。人生は本来の道からはずれているものであり、われわれの老年は、他のすべての病気と同じように治療しなければならない病気なのである。ながい間人びとは、歯のはえるときの子どもの病気は避けられない苦しみであって、それに対しては何もできず、また何もする必要がないと考えていた。現在では、これは伝染性の病気であって避けることができるし、避けなければならない、ということが知られている。ひとたび老年が治療され、生理学的なものとなれば、それは、われわれの本質に深く根ざしているはずの真の自然的な終末に導くのである。

このような目で見るなら、人生は、もはや無意味なものではなくなる。それは、人びとがそれにむかって意識的に努力しなければならない意義と目的をもつようになる。科学だ

けが人間の存在の課題を解決することができるのであり、したがって科学には、この方向にむかって、もっとも広範な活動の場が与えられなければならない。

私は何年か、物事をこの観点から観察してみた。そして、論理的にすべてがそれと一致することを信じるようになり、読者のためになんらか役にたつことを期待して、自分のこの考えを読者と分かち合うことにきめた。私の意見の多くが仮説的であることは、私自身、十分に承知している。しかし有効な資料というものは、まさに仮説によってえられるものなのだから、それらを公表することを、私はすこしもためらわない。私よりもっと若い力が、それらを検討し発展させてくれるであろう。私のこの試みは、すでに生き終えた世代から新しい世代への一種の遺書だと思ってもらいたいのである。

なお、本書の第一章は、一八七七年の「ヨーロッパ通報」に掲載した私の人生観の概説の前半を改筆したものである。

第一部

人間の本性における調和と不調和

第一章＊人間の本性についての概観

人間性についての考察の重要性
道徳の基礎としての人間の本質
ギリシア人による人間性の尊重
古代哲学者のメトリオパシー
一八・一九世紀の合理主義
宗教の教義による人間性の軽視
これらの考え方が生活および芸術に対して及ぼした影響
人間性軽視に対して宗教改革が行なった反抗
未開人による人体損壊

人はよく、科学によって達成されたすばらしい成果を考えずに、科学についてのある種の不満を述べる。科学は人間存在の物質的条件を改善するのは確かであるが、文明人がもっとも関心をもっている道徳的、あるいは哲学的な問題となると、いぜんとして無力である。この方面で、科学はただ宗教の基礎をこわすだけであり、人から宗教の慰めを奪うが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com